

●【話題を追って3】弘前大の「酷暑期避難所演習」

弘前大学が产学研官連携で「酷暑期避難所演習」を実施 酷暑から"いのち"を守る人材(防災士も)を地域と共に育て、災害関連死ゼロを目指す



弘前大の「酷暑期避難所演習」チラシより
(画像クリックで拡大表示／以下同様)



写真上から、段ボールベッド設置、水の確保、就寝時訓練

● 弘前大・富澤登志子教授が企画、青森県・避難所・避難生活学会と合同主催

弘前大学(青森県弘前市)は8月18・19日の2日間、青森県と一般社団法人避難所・避難生活学会との合同主催で「2025年度あおもり酷暑期避難所演習」を行った。この事業は、同大大学院保健学研究科の富澤登志子教授が企画したもので、青森県内の自治体防災担当および関係者、弘前大学の学生らを対象に実施。長期避難が予測される酷暑期災害を想定した演習として、県内の各自治体が備蓄品を持ち寄り、避難所の設置や非常食による食事、宿泊体験などを通じた実践的な訓練となった。そのほか、講義やグループディスカッションも実施され、地域の防災力向上に寄与する取組みとなった。

弘前大学では複合災害看護教育プログラムや防災士育成を推進し、災害に対応できる人材の育成に努めていて、「あおもり酷暑期避難所演習」は、これらのプログラムを受講している学生たちをはじめ、県内の自治体職員、企業などが参加して行われた。

● 北東北でも酷暑の時期が増加 災害関連死を防ぐためには環境整備を

初日の8月18日は12時に開会、弘前大学の福田眞作学長と避難所・避難生活学会の水谷嘉浩代表理事による挨拶の後、「東北における熱中症対策」と「災害関連死を防ぐための方策」の講義を実施。講義後は体育館で避難所設置の演習を行い、参加者はトイレや段ボールベッドの設置を体験。夕方には自治体持ち寄りの非常食を調理し、グループで食事。夜はコインシャワーでのシャワーワーク、体育館での宿泊環境や睡眠の質を計測した。

翌19日は早朝6時起床、7時には温かい朝食を弘前大学生協が提供。午前中は「酷暑期避難所における健康被害防止の課題と対策」についてグループディスカッションと発表、アンケート記入が行われ、11時30分に閉会式と記念撮影をもって演習は終了した。両日を通じて、災害時における知識と技術習得を目指し実践的な活動に取り組むとともに活発な議論と交流が行われた。この演習での経験が、厳しい環境下での避難所において被災者の災害関連死を防ぐように予測的な行動を促すきっかけとなることが期待される。

同事業の企画者である富澤教授は「近年、北東北でも酷暑の時期が増加しており、さまざまな災害に備えた対策が求められている。災害関連死を防ぐためには、環境整備とともに、地域の自治体やボランティアが一体となった訓練が不可欠。弘前大学では、複合災害看護教育や防災士育成を進めてきたが、実践力を身につけるための機会を提供し、地域の防災力向上に寄与したい」とコメント。

弘前大学では今後も地域と連携し、災害に強い社会づくりを目指すための取組みを進めていくとしている。

[>>弘前大学:产学研官連携で「酷暑期避難所演習」を実施 — 酷暑から"いのち"を守る](#)

● アフガニスタン東部 M6.0地震 機性者2200人以上か 自然災害は政治体制を選ばないが、復旧を左右する

アフガニスタン東部で日本時間の9月1日未明に発生したマグニチュード(M)6.0の地震について、1週間を経た7日付けのAFP通信によると犠牲者は2200人を超える、過去数十年に同国で発生した最悪の地震被害となった。

余震を恐れ屋外で寝泊まりする住民も多いようだが、被災地は山深く、道路・通信の脆弱性が救援を遅らせている。また、現地で実権を握るイスラム主義勢力タリバンの暫定政権は、国際社会に支援を要請しているものの、各国の支援活動は始まったばかりで復旧や復興の見通しは立たないようだ。

タリバン暫定政権下での平時の閉鎖的な統治姿勢が非常時の国際的な受援体制の欠落に通じており、二重の災いとなっている。

[>>日本ユニセフ協会:アフガニスタン東部地震 半年間の支援計画を立ち上げ](#)

BOSAI+ Topics



M6.0の強い地震により倒壊したアフガニスタン・クナール県の自宅前に立つ6歳のアジザさん(アフガニスタン、2025年9月2日撮影／日本ユニセフ協会)

© UNICEF/UNI859079/Meerzad